

## 令和6年度北海道科学技術賞受賞者功績概要

氏名	渥美 達也（61歳） ※ 年齢は令和6年4月1日現在		
所属・職名	北海道大学病院 病院長	現住所	札幌市中央区
<p>&lt;功績名&gt; 「難治性自己免疫疾患の診断法・新規治療法開発ならびに治療標準化に関する功績」</p> <p>&lt;功績の内容&gt; 北海道に5,000人ほどの患者数と推定される全身性エリテマトーデス（SLE）は、全身の臓器に自己免疫反応が起こり、強い炎症や臓器障害を来す難病である。抗リン脂質抗体症候群（APS）はSLEに合併するか、または単独で発症する自己免疫疾患で、免疫反応の結果、全身の血栓症や不育症（流産）をおこしてしまう疾患である。 氏は、APSの病態を明らかにする研究をベースにして、SLEやAPSの効率的な診断と最適な治療方法を探究する研究を行っている。自己免疫疾患はグルココルチコイド（ステロイド）や免疫抑制薬などの強い薬が必要なことが多く、免疫抑制の結果として感染症の副作用が問題となる。氏はAPSを自己免疫疾患のモデルとして、どの分子をターゲットにすれば免疫を抑制しないで自己免疫疾患を治療できるか示してきた。 氏がリーダーとしてまとめたSLE診療ガイドラインおよびAPS治療の手引きは、広く難病治療に使用され、ガイドラインを参照すれば日本のどこでも標準的な治療が受けられるようになっている。</p> <p>&lt;経歴&gt; （略歴）</p> <p>昭和63年 3月 北海道大学医学部医学科卒業 平成4年 3月 北海道大学大学院医学研究科博士課程修了 平成4年 4月 北海道大学医学部附属病院第二内科（医員） 平成6年 3月 英国聖トーマス病院レイン研究所（研究員） 平成9年 7月 北海道大学医学部附属病院第二内科（医員） 平成9年 9月 北海道大学医学部附属病院第二内科（助手） 平成11年 6月 北海道大学医学部第二内科（講師） 平成22年 4月 北海道大学大学院医学研究科免疫・代謝内科学分野（准教授） 平成24年 1月 北海道大学大学院医学研究科免疫・代謝内科学分野（教授） 平成29年 1月 北海道大学大学院医学研究院免疫・代謝内科学教室（教授）へ改組 令和4年 4月 北海道大学病院長・北海道大学副学長 ～現在～</p> <p>（受賞歴）</p> <p>平成29年 3月 北海道大学 優秀研究賞 令和2年 8月 日本リウマチ学会 学会賞 令和3年12月 北海道医師会賞・北海道知事賞 令和6年 9月 伊藤太郎学術賞</p>			

## 令和6年度北海道科学技術賞受賞者功績概要

氏名	瀬戸口 剛（61歳）		
	※ 年齢は令和6年4月1日現在		
所属・職名	北海道大学 理事・副学長 北海道大学大学院工学研究院 教授	現住所	札幌市中央区
<p>&lt;功績名&gt;</p> <p>「人口減少の先にある人口安定社会に向けたコンパクトシティ実践研究」</p> <p>&lt;功績の内容&gt;</p> <p>わが国の人口減少は今後急速に進行し、人口規模に見合ったコンパクトシティの形成が求められる。さらに、約50年後の2070年には超高齢化社会は解消され、各世代が等しくなる人口安定社会になり、多様性のあるコンパクトシティの形成が必要になる。</p> <p>氏は、人口減少の課題をいち早く抱え財政破綻した北海道夕張市において、人口安定社会に向けた夕張市コンパクトシティ計画を主導および実践し、夕張市の再生に向けて大きく貢献した。</p> <p>具体的には、夕張市まちづくりマスタープランにおけるコンパクトシティの計画、夕張市真谷地地区の市街地集約化の計画および実践、夕張市の市街地集約化事業における維持管理コストの縮減効果を解明、わが国の地方都市における市街地集約化における維持管理コスト縮減効果の理論化、夕張市コンパクトシティの中核となる拠点複合施設「りすた」の計画設計、夕張市コンパクトシティを推進するための科学的根拠を明示し夕張市立地適正化計画を主導、など、多岐にわたり夕張市の再生に寄与している。</p> <p>これらの研究および実践の成果は、夕張市のみならず、北海道およびわが国の地方都市におけるコンパクトシティ計画の実践に大きく貢献している。</p> <p>&lt;経歴&gt;</p> <p>（略歴）</p> <p>昭和61年 3月 早稲田大学理工学部建築学科卒業</p> <p>昭和63年 3月 早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了</p> <p>平成3年 3月 早稲田大学大学院理工学研究科博士課程単位取得修了</p> <p>平成2年 4月 早稲田大学理工学部 助手</p> <p>平成3年 4月 北海道大学工学部 助手</p> <p>平成7年 4月 北海道大学工学部 助教授</p> <p>平成13年 9月 カリフォルニア大学バークレイ校 客員研究員</p> <p>平成22年 5月 北海道大学大学院工学研究院 教授</p> <p>平成29年 4月 北海道大学大学院工学研究院 副工学研究院長 教授</p> <p>令和元年 4月 北海道大学大学院工学研究院長・工学院院长・工学部長 教授</p> <p>令和6年 4月 北海道大学理事・副学長、大学院工学研究院 教授</p> <p>～現在～</p> <p>（受賞歴）</p> <p>平成26年 5月 日本建築学会賞（論文）受賞</p> <p>平成26年 5月 日本都市計画学会計画設計賞受賞</p> <p>平成28年 3月 すまいづくり表彰地域住宅賞受賞</p> <p>平成28年 7月 国土交通大臣表彰国土技術開発賞創意開発技術賞受賞</p> <p>平成30年 5月 公共建築賞受賞</p> <p>令和3年 2月 北海道赤レンガ建築賞</p>			

## 令和6年度北海道科学技術賞受賞者功績概要

氏名	仲瀬 裕志（59歳） ※ 年齢は令和6年4月1日現在		
所属・職名	札幌医科大学医学部医学科消化器内科学講座 教授	現住所	札幌市中央区
<p>&lt;功績名&gt; 「北海道炎症性腸疾患患者医療均一化を目指した遠隔医療体制の確立」</p> <p>&lt;功績の内容&gt; 氏は、炎症性腸疾患（IBD）領域において臨床・基礎研究の分野で多くの業績を挙げ、日本のみならず世界にその成果を発信してきた。 診療面においては、道内各地域の IBD 治療の格差をなくすために、COVID-19 禍の 2021 年より各機関病院と IBD 診断・治療における遠隔医療を開始した。 開始当時、診断確定済みの IBD 患者の遠隔診療の保険診療加算は認められてはいなかったが、氏は、そうした患者に対して無償で遠隔診療を継続してきた。 本取り組みは、地方に居住する IBD 患者とその家族の負担低減の点において大きく、道内 IBD 患者の Quality of Life の向上に寄与した。</p> <p>&lt;経歴&gt; （略歴） 平成 2 年 3 月 神戸大学医学部医学科卒業 平成 13 年 3 月 京都大学大学院医学研究科内科系専攻博士課程修了及び学位取得 平成 2 年 6 月 神戸市立中央市民病院 臨床研修医 平成 4 年 5 月 愛仁会高槻病院 医師 平成 6 年 7 月 西神戸医療センター消化器内科 医師 平成 12 年 1 月 日本学術振興会 特別研究員（DC2） 平成 13 年 4 月 日本学術振興会 特別研究員（PD） 平成 13 年 10 月 米国ノースキャロライナ大学消化器病センター 博士研究員 平成 15 年 8 月 京都大学光学医療診療部 助手 平成 17 年 4 月 京都大学消化器内科学 産学官連携講師 平成 20 年 4 月 京都大学医学部附属病院内視鏡部 講師 平成 28 年 2 月 札幌医科大学消化器内科学講座 教授 令和 4 年 4 月 札幌医科大学医学部 副学部長 ～現在～</p> <p>（受賞歴） 平成 17 年 9 月 Asian Pacific Digestive Week 2005 Oral presentation award 受賞 （アジア太平洋消化器病学会における優秀演題賞） 令和 6 年 3 月 内閣官房デジタル田園都市国家構想冬の Digi 田甲子園 入賞</p>			